

理性いま大磐石に壓せられ情たゞもゆる胸うつくしき。  
 ものなべて足らふ心地に春の夜路踏まんとするに心足らぬかも。  
 戯れの礫の傷手に息ほそる鳥のやうなる春の夜の風。  
 白き骨矢の根のまじる新墾地にいばりいたまし秋は夕月のする。  
 月見草觸れなば魂は幽暗の囹圄にらむに落ちんとをそれて寄らず。  
 月見草駒並めて立つ禁軍のをほしきゆめみ咲きいづるかな。  
 醉ふや君大和名匠が鍛わつる黄金々具の太刀振りて舞ふ。(叱龍に)

漢

詩

月照上人五十年忌辰詣其墓有作兼弔信海上人

落合東郭

扁舟一棹古城東。忽漫葬身魚腹中。夙夜勤王是高袂。死生同志有英雄。枉教屈子憂方切。豈此靈胥恨不窮。後五十年天日麗。墓門花帶錦江風。  
 壞色衣寒幾歲間。匪躬致節閱辛艱。寄心玉葉青蓮院。修法白雲高野山。兄弟爲僧緣未了。風塵下獄夢難閑。如今四海霑皇澤。如識蒼天不老慳。

森槐南曰、下筆命意、極爲沈遠、後詩中幅、唯就其事蹟叙去、便覺雅音諧暢、非氣粗筆縱者之所

夢想

題放浪記用韓文公山石韻應木村竹南囑

同

倉○韻○作○字○其○旨○微○。無○端○鬼○哭○粟○雨○飛○。文○章○不○朽○稱○盛○事○。況○復○字○體○競○瘦○肥○。眼○中○一○卷○放○浪○記○。歎○息○世○間○  
知○亡○稀○。萬○里○幽○燕○携○筆○去○。俯○仰○感○慨○或○忘○饑○。寄○跡○津○門○論○時○勢○。七○十○二○沽○水○映○扉○。遠○上○長○城○勞○北○望○。  
艷○帳○想○他○雪○霏○々○。客○途○回○首○嫌○干○謁○。可○憐○病○骨○減○腰○圍○。一○片○耿○々○唯○如○此○。不○使○鑑○塵○染○素○衣○。日○月○跳○丸○  
風○雲○變○。身○小○膽○大○早○脫○鞵○。韓○柳○歐○蘇○千○載○士○。不○知○何○人○可○適○歸○。

森槐南曰、神怡氣靜、意甚雍容、

俳句

紫五吟社例會

短夜

躓きし馬にぞ驛は明け急ぐ 南 若

短夜や造る素焼に明け白む

逆襲の噂ばかりや明け易き 鬼菓子

明け易きホイロの煙壁を洩る 黙牛

水門の口に鳴る瀬や明け易き 青花

夜の漁の舟曳く濱や明け易き 江村

田の燈に虫の集いや明け易き

上り帆を呼ぶ下り帆や明け易き 水郷

麵棒に鼠打ちけり明け易き